

目が覚めると、鮎子がぼくの顔をさかさまに覗き込んでいた。鮎子の長い髪が両頬をくすぐっている。

「おはよう」

「……おはよう」

「よく眠れた？」

「……悪夢を見た」

ソファから上半身を起こした。雨粒が葉にぶつかるような音が聞こえる。そんなはずはないのに。

夢の中で鮎子はいつも以上にやさしく、丁寧でしつかりとそこに存在していた。何の不安もない笑顔をぼくに向け、いつも通りぼくは微笑みを返す。それが本当ではないとわかってはいたけれど、ぼくらは高校生だった。今はもう人手に渡った古い祖父の家で、ぼくらは暮らしていた。庭には紫陽花が植えられていて、雨の日にそれを見るのが楽しかった。縁側の窓も障子も全部開けて、横になってぼんやりと雨粒が紫陽花を濡らす様子を眺めていた。大抵そのまま眠ってしまうと、起きたときには窓は閉められている。風邪をひくから寝るときは毛布が何かをかけなさい。現実には祖母が注意してくれたのだけど、夢の中では鮎子が代わりに注意した。

「もう子供じゃないんだから」

鮎子が笑う。高校生は子供ではないだろうか。高校生になるまでは、大人だと思っていた。なってみて、案外子供だと思う。

「ご飯作るね」

天井の低い、薄暗い台所で鮎子が包丁を持つ。板張りの床、コンクリートで固めた流し。祖母が歯磨きに使っていた塩の入った容器はジャムの入っていた瓶だった。流しの上で変わらずにそこにある。雨上がり、鳥が鳴いている。

トントントン、とりズムよく響く包丁の音。いつの間にかコンロに鍋がかけられていて、沸騰するそれを止めながら鮎子が振り返る。

「もう少し待つてね。すぐできるから」

またまな板に向かう。鮎子がうつむきがちに包丁を動かすたび、長い髪がゆらゆらと揺れた。料理するのに邪魔そうだから結んであげよう、ぼくは鮎子の後ろに立つ。手にはいつの間にか白いヘアゴムがある。

「ああ、ありがとう」

ぼくの行為に気づいた鮎子がお礼を言う。ところが、ぼくは手を止めた。髪をまとめようとしたそのとき、見てしまった。艶やかな白いうなじ、その中心に五百円玉くらいの金属製の何かがあった。顕微鏡の部品のような円形のそれは、ねじで、鮎子の首筋にとめられていた。恐る恐るそれに触れると、ひやりとした感触、空気を吐き出す小さな音。金属製の円板が、カメラのシャッターのようにふたつに分かれ、開いた。中にはボタンがあった。非常ベルのような

明らかなボタン。

これ、とぼくが言うのを遮って、振り返らないまま、包丁を持つ手を止めないままに鮎子が言った。

「触らないでね。止まつちやうから」

リズムよく包丁の音、雨上がりを楽しみ鳥たちの声、どうしても問わないまま、ぼくはそのボタンを押した。

包丁の音が止まる。

「鮎子……？」

下から視き込むように顔を見る。切り刻んでいたねぎを見つめたまま、その腫は動かない。まばたきがない。

鮎子が止まった。目が覚める。

鮎子はいつの間にかいなくなっていた。見慣れない部屋を歩き回る。鮎子は寢室の豪華なドレッサーの前にいた。ドレッサーは部屋の左手の奥に置かれ、椅子に座った鮎子のすぐ右の壁が窓だった。22階からの景色。曇天の空。

「ちよつと待つてね。準備するから」

鏡の中の鮎子がぼくに言う。その言い方がやさしくて、ぼくは鮎子に近づいた。そつと髪を分けてうなじを見る。艶やかで白いうなじには何もなく、思わず息をはいた。キスしようと顔を近づけたぼくに、前を向いたままの鮎子が言う。

「ボタンなら、うなじじゃなくて胸元よ」

ぼくはあつさつていた。ひざの裏にベッドが当たり、ベッドにしりもちをつく。

「……そんなに驚かせちゃった？」

振り返った鮎子ににっこりと笑う。

「ボタンとか、鮎子がどうとか寢言で言つていたから。わたしのどんな悪夢を見たのよ」

鮎子がぼくの横に座り、ぼくは夢の内容を話した。

「ふたりとも高校生か。そのころ出会っていたら、青春時代をふたりで過ごせたのにね。残念」

ぼくたちが出会つたのは、大学を卒業した後。お互い、高校生のころを知らない。

「行こう。もうすぐディナーよ」

立ち上がった鮎子は寢室のドアまで歩き、そこで振り返った。

「わたしたち、結婚したのよね」

そらだよ、と言いと頬を赤らめて鮎子は笑った。機械にはできないはずの笑顔。

2222号室、と書かれた鍵を持つてぼくらは部屋を出る。誰もいないエレベータの中、鍵を持っていない方の手を鮎子がにぎってきた。手をつないだままエレベータは音もなく下がっていく。

「わたしが機械だったら、いつまでも一緒にいられるのにね」

つないだ鮎子の手は、なめらかで、ひんやりと冷たかった。